

ぶらぐり

日本はWTO農業交渉において、農業は経済的機能以外の多くの機能(多面的機能)を有しているとして、農業に対する無制限な自由貿易原則の適用を批判し、貿易ルールを各国の農業が共存するようなものにするべきであると主張している。

経済学(新古典派経済学)には、市場経済は経済の効率化をもたらすという考え方(パレート最適原理)があり、自由貿易理論は貿易に対する規制は市場(貿易)を歪め望ましくないとしている。WTO(GATT)は、

この自由貿易理論に基づいてこれまで貿易自由化を進めてきた。しかし、自由貿易理論は完全競争市場という現実にはない特殊な仮定に基づいた理論であり、その一つとして外部経済、公共財の無視がある。日本の主張する多面的機能論は、農業には外部経済や公共財としての側面があるとして、自由貿易主義の修正を主張するものである。

日本では、農林業は国土保全機能、環境保全機能、社会安定化機能等、食料・木材生産以外の機能を持っていると考えている国民は多く、農業・林業の多面的機能を賃

幣評価すると数十兆円あるというような計算結果については多少の疑問を感じたとしても、日本に農林業がなくなってもよいと考えている国民はそれほど多くはないと思われる。しかし、国際的には、多面的機能論に理解を示す国がある一方で、多面的機能論は農業保護の新たな口実に過ぎないと批判する国がある。

OECDはこれまで一〇年以上にわたって農業・環境・貿易の相互連関に関する研究を行ってきたが、本書はOECDが九九年から行なった「農業の多面的機能」に

『農業の多面的機能』

OECD著(農山漁村文化協会)

関する研究の成果を整理したものである。

本報告書は大きく二つの部分から構成されている。一つは、農業生産と多面的機能の関係を整理した部分であり、多面的機能が農業生産と一体であるならば農業生産の縮小が多面的機能の低下をもたらすが、もし一体でないのであれば、農業政策(貿易政策)と分離(デカップル)して多面的機能だけに焦点を当てた別の政策により解決できるとしている。もうひとつの部分は、農業の外部経済(不経済)、公共財について整理したものであり、多面的機能と貿易

との関連も考察している。

本書の大きな特長は、公共経済学を中心に近年の新しい経済学の分析手法を多く取り入れていることであり、その点で、経済学の訓練を受けた専門家以外には理解するのがやや難しい内容になっている。また、日本では農業の外部経済(環境保全機能、国土保全機能等)のみを議論しており、しかも、それを主に農業の研究者が行なっているためどうしても我田引水になりがちであるが、本報告書は農業の外部不経済(環境負荷等)についても議論しており、その意味で客観的で多面的な分析になっている。

ただし、本書の結論はそれほど明快ではない。この問題は国、条件によって大きく異なり、単純化できない複雑な問題であるということである。いずれにせよ、本書は問題点を整理し今後の課題を提示したという意味で貴重な成果であり、今後のWTO交渉にも影響を与えることになる。

なお、日本の主張する農業の多面的機能論は理解できるようにしても、農業には環境に負荷をかけている側面もあり、今後日本では、環境に負荷をかけない農法や粗放型畜産を支援するよつな政策、農業環境政策の本格的導入が求められているといえよう。

(二〇〇二年九月、一九六頁、四、六〇〇円)
(清水徹朗)